初級簿記

【第8回】簿記の基礎（Ⅰ）～（Ⅵ）の復習

第1回：文化祭と会社の違い

1. 文化祭で焼きそばの出店
   - 10人で一人1,000円を出し合い、その他に先生から5,000円を借りて、材料の購入や器材をレンタルして準備し、当日100食のうち98食を販売することができた。
   - 利益はいくら？
2. 会社を設立して開業
   - 10人から一人当たり100,000円を出資してもらい、その他に銀行から500,000円を借りて、商品の仕入や備品を購入して準備し、1,000個仕入れた商品のうち800個を販売することができた。
   - 利益はいくら？

第1回：ポイント

- 文化祭と会社の違い

① 文化祭は事業の期間が決まっている。

② 会社は事業の期間が決まっていない。

③ 文化祭は最後に清算をして、現金がいくら増えたかで利益を計算する。

④ 会社は清算しないので、現金だけではなく、その他の財産なども考慮しながら、いくらで仕入れたものをいくらで売ったのかで利益を計算する。

第2回：会社の設立・開業の続き

3. 引き続き営業
   - 商品を1,500個仕入れて、1,200個を販売した。
   - 利益はいくら？

第2回：ポイント

- 引き続き、文化祭と会社の違い

① いくらで仕入れたのか、いくらで売ったのか、いくら商品が残っているのか、現金がいくらあるのか、借入金がいくらあるのか、元手がどのくらい増えたのか（すべてに着目して考える）

- 点と点の比較、線の内容について考える

① 点と点とは(1)と(6)の比較（財政状態の比較）

② 線の内容とは(1)～(6)の間に起きた内容（経営成績の把握）

第3回：貸借対照表と損益計算書

- 利益を計算するのは頭が混乱して難しい
- 表にまとめる
  - 点の内容（財政状態）⇒　貸借対照表
  - 線の内容（経営成績）⇒　損益計算書

第3回：ポイント

- 貸借対照表で計算された利益 ＝ 損益計算書で計算された利益
- 貸借対照表で計算される利益
  - 期末純資産－期首純資産＝利益
- 損益計算書で計算される利益
  - 収益－費用＝利益

第4回：資産・負債・純資産・収益・費用

- 資産：現金、売掛金、商品、備品など
- 負債：借入金、買掛金など
- 純資産：資本など
- 収益：売上、受取利息など
- 費用：売上原価、給料、支払利息など

第4回：ポイント

- 結果（点の内容）：資産、負債、純資産
- 原因（線の内容）：収益、費用

- 貸借対照表の構成（借方：資産、貸方：負債・純資産）
- 損益計算書の構成（借方：費用、貸方：収益）
- 貸借対照表と損益計算書を合わせると左右が一致する。

第5回：仕訳

- 資産・負債・純資産・収益・費用の増減は、図にした時、左右が一致する形で生じている
  - 資産が増えるとき　→　負債が増える
  - 資産が増えるとき　→　資産が減る
  - 費用が発生するとき　→　資産が減る
  - 収益が発生するとき　→　資産が増える
  - などなど…　逆も然り
- 上記の現象を使用して記録を行う　⇒　仕訳

第5回：ポイント

- ひとつの取引を借方と貸方に記録する
- 貸借対照表、損益計算書の資産・負債・純資産・収益・費用のそれぞれの項目の基本位置が超重要！
- ひとつの仕訳の左右の金額は必ず一致する！

第6回：転記、試算表

- 仕訳はできるが集計が大変だし、ミスもしてしまいそう
- 仕訳のつど、勘定科目ごとに増減を記録しておくと集計が楽（転記）
- 転記をしておくことによって、集計は楽になったが、仕訳や転記を間違えているかもしれない。
- 仕訳や転記が間違っていないかチェック表を作成しよう。（試算表）
- ひとつひとつの仕訳は左右が同額なので全体でも同額のはず

第6回：ポイント

- 集計をミスなく楽にするために転記する
- 総勘定元帳へは日付、相手勘定、金額を記入する
- ミスがないか確認するために試算表を作成する
- 勘定ごとに借方・貸方それぞれの合計を記入する合計試算表、勘定ごとに残高を記入する残高試算表、勘定ごとの貸借の合計と残高の両方を記入する合計残高試算表がある